

21

10月31日・火曜日 2017年(平成29年)

TYPE OF
INDUSTRY

情報通信研究機構

NICT 先端研究

C.iNet

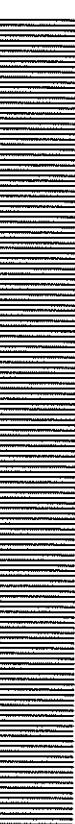
(15)

つて末梢レベル、すなはち感覚器において理解が進んでいる。しかし、末梢からの情報を処理する脳の働きについては、まだ知見に乏しい。

脳情報通信融合研究

嗅覚や味覚、すなはち匂いや味の物質感知する化学感覚は、動物にとっては食物の探索された動物と人間を対象として、匂いや味の識別、認知、記憶に関する脳活動をfMRIで測定している。

科学技術・大学



味とにおい、脳で評価

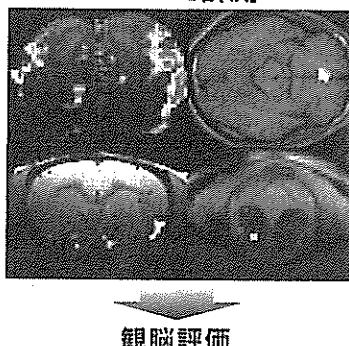
脳情報通信融合研究
センター主任研究員

黄田 育宏

1997年北大院修了後、米イエール大で6年半勤務。北大助教、都医学研究員を経て、12年より現職。fMRIの基礎研究および化学感覚脳内機構に関する研究に従事する。博士(理学)。



匂いや味に関係する脳活動をfMRIで計測



識別 情動

認識 記憶

観察評価

な役割を果たしていることを明らかにした。味覚機能についても、最近注目されている脳相關の研究を行っている。うま味物質の摂取による脳活動の計測、脳の機能的結合の領域間の機能的結合の増加を発見した。このことは、うま味物質になると期待されるの摂取が、摂食調節の

10月31日(火曜日)掲載

ーンを示す。」のペタ

ーンを「匂い地図」と

の情報が興味にどのよ

ざまな工夫を重ね、M

RI装置の中で生きた

サケの脳活動を記録す

ることに成功した。

呼んでいる。我々は、うに符号化されるか、

匂い濃度や匂いを嗅ぐ

といふ観点からの嗅覚

受ける嗅球という脳

内に場所に注目した。

球内のさまざまな領域

には一つの「匂い地図

おり、サケの匂い記憶

が対応しているのであ

が関係していると言わ

う行動は良く知られて

するサケの脳の領域を

見つけ、母川の水の記

銘や想起において重要